

## 方丈記

鴨長明

S.Tajima 訳 ver1.0 © 2020

川の流<sup>た</sup>れは絶<sup>た</sup>えることは無いが、流<sup>た</sup>れる水は常に入れ替<sup>か</sup>わっている。よどみには泡<sup>う</sup>がで<sup>き</sup>たり消<sup>え</sup>えたり、これも永<sup>とこ</sup>くは続<sup>つ</sup>かないものだ。世の中に生<sup>い</sup>きている人もその住<sup>す</sup>家<sup>み</sup>も似<sup>に</sup>たようなものである。

都<sup>みやこ</sup>会<sup>かい</sup>には、裕<sup>ゆう</sup>福<sup>ふく</sup>な住<sup>す</sup>民<sup>みん</sup>の邸<sup>やしき</sup>がな<sup>ら</sup>び、その屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>が続<sup>つ</sup>いている。こ<sup>こ</sup>うい<sup>い</sup>う家<sup>け</sup>は、時<sup>とき</sup>代<sup>だい</sup>を<sup>へ</sup>経<sup>へ</sup>て続<sup>つ</sup>いてい<sup>い</sup>る様<sup>よう</sup>に<sup>み</sup>え<sup>え</sup>るが、少<sup>すこ</sup>し調<sup>てう</sup>べ<sup>べ</sup>るだ<sup>け</sup>で昔<sup>むかし</sup>から<sup>の</sup>もの<sup>は</sup>少<sup>すく</sup>ない<sup>と</sup>知<sup>し</sup>れる。去<sup>こ</sup>年<sup>ねん</sup>壊<sup>こわ</sup>して、今<sup>いま</sup>年<sup>ねん</sup>建<sup>た</sup>て<sup>た</sup>と<sup>か</sup>、大<sup>おお</sup>き<sup>き</sup>な屋<sup>や</sup>敷<sup>しき</sup>の<sup>あ</sup>とに小<sup>こ</sup>さ<sup>な</sup>な家<sup>け</sup>が建<sup>た</sup>つと<sup>か</sup>、住<sup>す</sup>ん<sup>で</sup>い<sup>い</sup>る人<sup>ひと</sup>間<sup>かん</sup>の浮<sup>う</sup>き沈<sup>しず</sup>みと<sup>お</sup>じ<sup>じ</sup>様<sup>よう</sup>で<sup>あ</sup>る。

街<sup>まち</sup>の様<sup>よう</sup>子<sup>こ</sup>が<sup>あ</sup>わ<sup>わ</sup>つ<sup>た</sup>た<sup>よう</sup>に<sup>も</sup>、人<sup>ひと</sup>が減<sup>へ</sup>つ<sup>た</sup>た<sup>よう</sup>に<sup>み</sup>え<sup>え</sup>な<sup>く</sup>と<sup>も</sup>、昔<sup>むかし</sup>から<sup>い</sup>る人<sup>ひと</sup>は二<sup>ふた</sup>、三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>人<sup>にん</sup>中<sup>ちゅう</sup>に<sup>ひ</sup>と<sup>ひとり</sup>か二<sup>ふた</sup>人<sup>にん</sup>位<sup>くらい</sup>な<sup>も</sup>の<sup>だ</sup>。朝<sup>あさ</sup>に死<sup>し</sup>ん<sup>で</sup>い<sup>い</sup>き、夕<sup>ゆふ</sup>方<sup>ほう</sup>生<sup>い</sup>ま<sup>れ</sup>る<sup>の</sup>は、ま<sup>ま</sup>こ<sup>こ</sup>に<sup>み</sup>ずの泡<sup>う</sup>の<sup>よう</sup>な<sup>も</sup>の<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>。生<sup>い</sup>ま<sup>れ</sup>て<sup>く</sup>る<sup>者</sup>、ま<sup>ま</sup>た<sup>死</sup>ん<sup>で</sup>い<sup>い</sup>く<sup>も</sup>の<sup>、</sup>ど<sup>どこ</sup>か<sup>から</sup>来<sup>き</sup>て<sup>ど</sup>こ<sup>へ</sup>行<sup>い</sup>く<sup>の</sup>だ<sup>らう</sup>か。棲<sup>す</sup>み<sup>か</sup>も<sup>す</sup>べ<sup>て</sup>飯<sup>い</sup>の<sup>も</sup>の<sup>、</sup>い<sup>い</sup>っ<sup>た</sup>い<sup>誰</sup>の<sup>た</sup>め

に悩み、どんな作りが気に入るのだろうか。住家と住人、どちらが先に消えるにせよ、朝顔の露つゆのようなもので、無常むじょうを感じる。

朝顔の露が落ち花が残っても、朝日の中で枯かれて行く。あるいは、花が先にしぼんで露が残るか。それでも夕方までには蒸発じょうはつしてしまう。

生まれてものの心がついてから四十年程、季節の移り変わりを経験したが、世の中の不思議も随分ずいぶんと見て来たものだ。以前、安元三年四月二十八日、風が激はげしく吹く夜、戌いぬの頃<sup>1</sup>、都の東南で火の手が上がり、これが北西へと燃え広がった。火は朱雀門、大極殿、大學寮、民部みんぶの省と移っていき、一夜にして焼き尽くしてしまった。

火元は樋口富ひぐちとみの小路こうじとかで、病人の仮住まいらしい。風向きが変わるたびに火が移り、扇あうぎの様に広がって行ってしまった。火から離れた家でも、煙が立ちこめ、近い処では炎が地を這はうよう吹き付けたという。

空には灰が舞い上がり、火の光を映して紅蓮色くれないになる中を、風に吹き飛ばされた炎が一、二町も空を飛んで行く。

その中に取り残された人の心には、すでに現実は無く、煙にむせんで倒れ、炎にまかれて死んでいくのみである。あるいは、ようやく、身一つで逃げ出したとしても、家財道具かざいどうぐは持ち出せない。色々な珍しいまた高価なものも皆灰塵かいじんと

なつてしまつた。一体どれだけの損害を出したのだろうか。

今回の火事で公卿の家が十六件も焼け、その他の家は何件焼けたかはわからない。都の三分の二が焼けたと言われ、数千人の男女が死に、牛馬に至つては数えきれない。

人の営みというのは、おろかなものだが、こんなにも危ない京の中に大金を費やし、悩んで家を作るなど、ナンセンスだと思ふべきだろう。

また治承四年四月二十九日のころ、中の御門京極あたりにに発生した竜巻は六条あたりまでひどく吹き荒れた。三、四町に渡つて吹き荒れた風は、その中にあつた家々、大小にかかわらず大きな被害を与えた。ペしゃんこにつぶれた家もあれば柱だけ残つた家もある。門の屋根が四、五町ほど吹き飛ばされた例も、垣根を根こそぎ吹き払い、隣の家との境が無くなつたというのものもある。

家の中にあつた高価な物も皆飛ばされ、檜皮葺の屋根など、木枯らしの中に舞う木の葉の様なものである。ゴミや土埃が風に吹かれ舞い上がり、目も開いていられず、風に吹き飛ぶ物の音で耳も聞こえない。これこそ、地獄で吹き荒れているという業風なのだろう。家が壊れるだけではなく、これを何とか直している間に怪我をして不具者となつたものも沢山いる。この竜巻は西南の方に向かつて多くの人々が被害を受けてしまつた。

<sup>2</sup> 中の御門京極は、中の御門大路と東京極通りの交差するあたり。

つむじ風はいつももあるものだが、これはただ事では無い。何か悪い兆候<sup>ちようこう</sup>では無いかと心配である。

又おなじ年の六月の頃、急に都を移してしまった。全く思いがけない事である。京の始めは嵯峨<sup>さが</sup>天皇が都とした数百年前に遡<sup>さかのぼ</sup>る。都をしつかりした理由なしで移してしまうのは、人々には理解もできない。しかし、こう言っても効果がなく、帝<sup>みかど</sup>を始めとして大臣、公卿<sup>くきよう</sup>みな摂津国難波<sup>せつつのくになにわ</sup>の京に移ってしまった。京に残った役人なんて一人もないのではないか。地位にしがみついて、上司<sup>かみ</sup>におもねる連中ほど、一日でも早く移ろうと頑張<sup>がんば</sup>ったようだ。時世に遅れた窓際<sup>まどぎわ</sup>族<sup>ぞく</sup>の様な競争力がない連中だけ、泣く泣く京に残ったのだ。

土地を争う様にして建てた邸<sup>やしき</sup>も毎日荒れていく。家は壊され、淀川<sup>よどがわ</sup>に放り込まれ、宅地は畠<sup>はたけ</sup>になっていく。人の心も変わってしまった、馬や鞍<sup>くら</sup>のことばかり考える様になってしまった。牛車<sup>ぎっしゃ</sup>を使う人もいなくなり、大坂辺りの近郊<sup>りようち</sup>の領地<sup>りようち</sup>を欲<sup>ほ</sup>しがり、東北<sup>しやうへん</sup>の莊園<sup>しやうえん</sup>などは要らないと言う。

こんな時に、ちょっとした用事があって、摂津の国の京に行つて見た。この土地を見ると、狭すぎて、東西南北に道を作ることができず、北はすぐ山となるし、南は湖に近すぎる。波の音はうるさいし、湖風<sup>うみかぜ</sup>も強い。天皇の住居<sup>すむ</sup>はと言えば、山の中に建てたので、例の木の丸殿<sup>まるでん</sup>がこんなだったのではという感じである。

解体し、その材料を運び出した家など、どこに建てるつもりなのだろう。

不向きな土地が多く、家はあまり建てられない。ふるさとの京は荒れてしまうが、新しい都は未だできない。皆、浮雲うきぐものような気分である。元々住んでいた連中は、土地を失って困り、移住しようとする人は、土木工事が面倒めんどうだと言う。

道を見ても、昔ならば車にのっていた人は馬に乗り、礼服れいふくを着るべき人が作業さぎよう着姿だ。

都の習慣がたちまち廃すたれて、単なる田舎侍いなかざむらいと同じである。これは世の中が乱れる印だとか言い始め、日が経つほど世の中の気分が浮足うきあし立って穩おだやかではない。とうとう人々の気持ちを落ち着けることができず、同じ年の冬には、また京にもどってきてしまった。しかし、壊こわしてしまった家をどうしたものか、すべて元のように造りなおしできないし。

それほどはつきりと聞いている訳では無いが、昔、もつと政權かしこが賢かしこかった時代には、人々のことを考えて国を治めたそうだ。つまり、自分達の御殿ごてんを立派にする代わりに、人々が貧しい時など税金めんじよさえ免除したと言う。こうして人々の生活を助け、世を成り立たせてきた。今の世の中と昔をよく比べて見るべきである。

また、養和ようわの頃か、いまではちよつとうろ覚えだが、二年程飢饉ききんがつづいて、酷ひどい状況であった。春から夏にかけての日照りに秋冬は台風や大雨、それに洪水

が続いて五穀<sup>ごこく</sup>が大不作だった。春に耕し、夏に植え付けたのに、秋から冬にかけて収穫<sup>しゅうかく</sup>できないのだ。

このため、農民など、その土地をすて他の国へ行き、あるいは家から離れて山の中に棲<sup>す</sup>むということがあった。色々と祈禱<sup>きとう</sup>をしたり、法要<sup>ほうよう</sup>などもしてみたけれど、効果はなかった。

京の生活全般、結局田舎に依存<sup>いぞん</sup>しているのに、京に上って商売をするものもなく、毎日の体裁<sup>ていさい</sup>さえ取り繕<sup>つくろ</sup>えない。家にある貴重品を何とかして、食物にしようとするけれど、相手にする人が無い。たまに、食料と交換する人がいても、足元を見て法外<sup>ぼうがい</sup>な金を要求する。乞食<sup>こじき</sup>が道にたむろし、悲しみの声で耳に一杯になる。そして、この年は、こんな感じで終わった。

次の年は、良くなるかと思つたのに、疫病<sup>えきびょう</sup>さえも流行し、いい事はなにもない。人が沢山飢え死にするので、日々の人々の様子は、水の枯れそうな池の魚を見ている様である。笠をかぶり、履物<sup>はきもの</sup>を着け、まともな着物をきたものさえ、家をめぐって食を乞<sup>こ</sup>う始末である。この様に落ちぶれてしまったのかと思つているうちに、どんどん倒れてしまう。土壁<sup>つちかべ</sup>のそばや道の端<sup>はた</sup>で飢え死にしているのも数えきれない。

死体を片付けることもできないので、悪臭<sup>あくしゅう</sup>が満ち、死体の腐<sup>くさ</sup>つていくのには

目も当てられない。まして河原など死体の山で馬車が通る道さえなくなっている。

身分の卑しいものも、山に棲むものも力が無くなり、薪さえも不足している。仕方なく自分の家を壊して、薪として売るのに、一人で持ち歩ける量では、一日の命を支えることさえできないという。こうして売っている薪の中には紅色や銀、金の箔がついている木切れがある。これはどうしたかと聞くと、どうしようもなくなくなった連中が古寺から仏像を盗んだり、お堂の仏具を破壊したものだと言う。こんな荒廃した行為を見るような、酷い時代に生まれついてしまったのである。

それに、悲しいこともある。大事に思う家族を持つ者は、家族を思い、家族より先に死に行く。男にせよ女にせよ、たまたま手に入った食べ物、大事にしている者に食べさせ、自分は後回しにするからだ。だから、親子なら、当然の様に親が先に死ぬ。また、母親が命がつきて、横たわっているのもしらず、乳房に吸い付いている幼子も居る。

仁和寺、慈尊院の大蔵卿隆暁法印という人が、このように多数の人が亡くなるのを悲しんで、他の僧侶に呼びかけ、屍者の額に「阿字」を書き、成仏する印としている。その人数を知るため、四、五月の間数えると京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東の中で、四万二千三百あまりであった。もちろん、調べた前後に死ぬものも多いし、河原、白河、にしの京、もろもろの

辺地などを加えれば際限もない数となろう。さらに諸国、七街道を加えたらどのような数に達するか。

最近では、崇徳院の時代、長承のころにこの様な例があると聞くが、その時代の様子は分からない。全く悲しい状態を目の当たりにしている。

また元暦二年のころ、大地震があつた。<sup>3</sup> その様子は全く尋常ではなく、山が崩れて川を埋め、津波が陸を襲つた。土からは水が湧き出し、岩が崩れて谷にころげ落ち、船は波にもまれ、道行く馬はよろけたと言う。

都の被害も甚大、あらゆる所の建物や塔で、まともであつたものがない。ある物は崩れ、あるいは倒れて煙のような土埃を巻き上げた。地が震え、家が壊れる音、雷鳴のようであつた。

家の中にいたものは、すぐに押しつぶされ、走りでたものは地割れを見る。羽が無いので空に飛びあがる訳にもいかないし、竜でも無いのだから雲に登ることもできない。地震ほど恐ろしいものは無いだろうと思う。

その中で、ある武士の一人っ子の話がある。六、七才の子供が、土堀の下に、小さな小屋を作つて遊んでいたところ、いきなり塀ごと埋められてしまい、つぶされ、両目が飛び出してしまったのを、両親が抱きかかえ、あまりの悲しみ



に声も出せなかったという。子供の悲しみには、勇敢な者も恥を忘れてしまった様で、これが人間なのだと思う。

地震は大きな揺れはその内収まったが、余震はかなりの間続いた。体に感じるゆれは一日に二、三十回はあった。十日、二十日たって、ようやく頻度がへり、一日に四、五回、二、三回から一日起き、二、三日に一度となった。それでも揺れは三月ほど続いたろう。水、火、風というのは常に被害を出す事があるが、これほどの地震でも、大地は変わらずにそこにある。

むかし齋衡のころであるが、大地震があり、東大寺の仏の頭が落ちるなど、とんでもない事があったけれど、今回ほどでは無かったようである。

地震があつた当座には、みなこの世の無常などと言い、多少は心の煩悩が薄らぐようだが、月日や年を経るにしたがつて、地震の恐ろしさを語る者は居なくなる。すべての世の暮らしにくさ、自分の体や住家のはかなさとはこう言うものである。それだから、皆、どこに住んでいようが、どんな身分であろうが悩みはつきない。

もし、自分が大した地位でもないのに、有力者の隣に住んでいると、大いに喜ぶ事があっても、大騒ぎできない。悲しいことがあっても大声で泣き叫ぶわけ

にはいかない。色々と遠慮してしまい、雀が鷹の巢のとなりに巣くっているようである。

また、自分が貧しく隣が裕福であると、妻子が引け目を感じ、使用人が隣をうらやむのを見、そして隣人が横柄になるのにも、心が穏やかではいられなくなる。自分の土地が狭ければ、近くに火事が起こった時、延焼してしまう。辺地に住んでいると、京までの往復が大変、途中で盗賊に出会いやすくなる。

元気でアグレッシブな人間は欲が深く、独身だと軽んじられる。金を持っていれば、恐れる事も多く、貧乏だとこれはまた悲しく切ない。

人に頼れば他人に支配され、ひとに親切にすれば、うまく使われる。世の中に合わせれば窮屈だし、合わせないと狂人のように見られる。

世の中のどこに自分を置き、どの様に生き、そして少しの間、自分の心を安らかにしていくべきなのか。

私自身は、父方の祖母の家にずっと住んでいた。しかし、思い出多い家とも縁がきれてしまって継ぐことができず、身体の都合もあり、三十歳過ぎになり自分で家を建てたのである。昔の家に比べたら十分の一ほどの大きさで、殆ど居室のみである。ちよつとばかり築地塀を作ったが門を建てる余裕は無かった。竹の柱で、ちよつとした車庫を作った。雪が降り、風が強いとちよつと危ないかもしれない。場所も、河原の近くなので、浸水の心配も、泥棒の心配も多少は

あろう。

こうやって、住みにくい世を耐えながら、浮世うきよの事を悩み続けて三十余年が過ぎてしまった。そして、時々訪れる人生の曲がり角を見るにつけ、自分の不運にも気付いたのである。そこで五十歳の春になった時、家をでて隠遁生活いんとんに入った。妻子もないので、捨てねばならぬ縁もない。官職かんしょくもないので、意地いじを張る必要もない。余計な事もせず、大原山の雲の下、また幾つかの春秋しゅんじゅうを重ねてきた。

六十を超えたこともあり、これで最後となる住家を作ることにした。狩人の仮住まいのような、かいこが作る繭まゆのようなものである。広さは、この前の住家に比べても、百分の一にもならない。こんな風に、歳としをとる毎に住家を狭くしてきた。その広さは世間には無い程で、一丈四方いちじょう、高さは七尺程である。ここもいわば仮の棲すみか、土地も私有はしない。

土台を組んで、屋根には簡単なおおいをかけ、柱はカスガイでとめた。もし気に入らなければ簡単に他に移れるからである。これを作る時、多少の面倒をかけたが、車にして二両だけであった。この他に費用は掛からなかった。

日野山ひのやまの奥の方に建てたのだが、南側には仮の日よけを出しておき、竹の

すのこを敷いた。西側に闕伽棚<sup>あかだな</sup>を作り、部屋の西側に、阿弥陀<sup>あみだ</sup>の画像を安置<sup>あんち</sup>した。夕日が入ると、阿弥陀さまの眉間<sup>みけん</sup>から光が差す。

部屋に掛けた帳<sup>とばり</sup>の内側には、普賢<sup>ふけん</sup>像と不動<sup>ふどう</sup>像をかけた。北側の障子<sup>しょうじ</sup>の上には小さい棚をつつて、籠<sup>かご</sup>を三四個おき、和歌<sup>わか</sup>、管絃<sup>かんげん</sup>、往生<sup>おうじょう</sup>要集<sup>ようしゅう</sup>などをしまっておく。そばには、琵琶<sup>た</sup>と琴をひとつづつ置いた。いわゆる折り畳み琴であり、琵琶である。

部屋の東側にはわらびの穂<sup>ほ</sup>を敷き、わらの敷物<sup>しきもの</sup>を寢床<sup>ねどこ</sup>とすることにした。東の窓<sup>ふつくえ</sup>のところには文机<sup>ぶんぐい</sup>を置き、枕に近いところに囲炉裏<sup>いろり</sup>がある。この中で小枝などを燃やすのである。

庵<sup>いおり</sup>の北側にはちよとした庭があり、隙間<sup>すきま</sup>の多い低い垣で囲った。ここに色々の薬草<sup>いかり</sup>を植える。

私の仮の庵の様子はこんなところであるが、南側には笥<sup>かげい</sup>があり、石で囲った水場に流れ込む。林が近くにあるので、小枝などを拾ってくるのに不自由はない。外山<sup>とやま</sup>というところであるが、真拆<sup>まき</sup>の葛<sup>かづら</sup>が群生している。谷には、草木が多いが西からの日はよく当たる。西方浄土<sup>さいほうじょうど</sup>の菩薩<sup>ぼさつ</sup>の姿を思い浮かべるのに具合がいい。春になると藤の花が咲き、紫雲<sup>しうん</sup>のようになって、西方より匂<sup>にお</sup>ってくるのも中々いい。

夏には郭公<sup>かつこう</sup>がなく。鳴くたびに、死出<sup>しで</sup>の山路<sup>やまじ</sup>が約束される様な心持になる。  
それに秋は日暮<sup>ひぐ</sup>らしの声<sup>こゑ</sup>が聞こえ、仮<sup>かり</sup>のこの世を悲しんでいるようだ。冬は雪が  
いい。つもっていくのを見てみると、人間の罪が積もっていくのを思わせる。

念仏<sup>ねんぶつ</sup>を唱<sup>とな</sup>えるのが面倒<sup>めんどう</sup>で、読経<sup>どきょう</sup>にも気が入らない時は、休んでしまう。自分で  
きめているのだから邪魔<sup>じゃま</sup>は入らないし、恥ずかしいと思わねばならぬ友人も無い。  
ことさら無言の行をする訳では無いが、ひとりなので、余計なことを口走<sup>くそう</sup>って  
罪をおかすこともない。

戒律<sup>かいりつ</sup>を厳<sup>きび</sup>しく守るというつもりもないが、そもそもそんな環境<sup>かんきやう</sup>ではないので  
問題<sup>7</sup>とはならない。岡<sup>7</sup>の屋<sup>7</sup>に向かう船<sup>ふね</sup>を眺<sup>なが</sup>めながら、沙弥<sup>さみ</sup>満誓<sup>まんせい</sup><sup>8</sup>の風情<sup>ふうじやう</sup>を拝借<sup>はいしやく</sup>、  
風<sup>かづら</sup>が桂<sup>かづら</sup>の木の葉<sup>は</sup>をゆする夕方<sup>きやう</sup>には、白楽天<sup>はくらくてん</sup>の詩<sup>し</sup>を想<sup>おも</sup>い出し、源経信<sup>みなもとつねのぶ</sup>の教<sup>しゆ</sup>えを  
想<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>そう。そして興<sup>きやう</sup>が乗<sup>の</sup>ったならば秋風<sup>あきふう</sup>が松<sup>しょう</sup>の木<sup>き</sup>をそよがせるのをバックに、  
水<sup>みづ</sup>の音<sup>おと</sup>に合わせて、一曲<sup>いっく</sup>演奏<sup>えんそう</sup>するのさ。大した芸<sup>げい</sup>とは言えないけれど、人<sup>ひと</sup>を  
ちよつと楽しませる位<sup>くらい</sup>はできる。一人で演奏<sup>えんそう</sup>、一人で謡<sup>うた</sup>って自分で楽しむという  
訳である。

麓<sup>ふもと</sup>には、雑木<sup>ざつぼく</sup>で作<sup>つく</sup>った小さな小屋<sup>こや</sup>がある。この山の番人<sup>ばんにん</sup>の住家<sup>すまが</sup>だが、子供<sup>こども</sup>が

7 昔、京の南にあった巨椋池<sup>おおくらいけ</sup>の事。  
8 万葉歌人。

居て時々私のところに遊びに来る。暇な時はこの子供を連れて遊び歩く。この子は十六歳で、私は六十、歳は離れているけれど遊びに歳は関係ない。季節の花を採ったり、こけももの身を集めたりする。むかごをもぎ取り、芹をつんだりもする。あるいは田んぼに行つて落穂を広い、穂組を作る。うらかな日には、山に登つて、ふるさとの空を見る。木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師などが見える。山から見る景色には持ち主がなく、勝手に登つて楽しめる。

歩きやすくて、気が向いた時には峰伝いに炭山を超え、笠取を過ぎ、岩間寺か、石山寺に詣でる。あるいは、栗津の原を抜けて、蟬丸翁の跡を訪れ、田上川をわたつて、猿丸大夫の墓をたずねるのもいい。帰りには、時分を見計らいながら、桜狩、紅葉狩り、わらび採り、それに木の実拾いをして仏前に備えたり、お土産にしたりする。

静かな夜には、窓から月を眺めながら故人を偲び、猿の声など聞くと、涙が出て来ることもあるのだ。草むらに見える螢の火は、遠い真木の島のがり火みたいなも見え、明け方に雨が降ると木の葉が吹かれて嵐かと思う。

山鳥がほろほろと鳴くのを聞くと、父や母を想い出し、山の鹿が近くによつて来たとしても、世の中からは遠ざかっているなど気付く。

朝起きると埋もれ火をかき起こして、暖まるのだが、これが老体に気持ちいい。フクロウの声を聴くと寂しく感じるが、おそろしい山ではないので、山中の趣きは四季にわたり尽きる事はない。まして、深く考え、深く知ろうとする人にとっては、興味は山の中にだけあるのではない。

此処に住み始めた当初は、ほんの少しの間かと思ったが、もう五年も経ってしまった。仮の庵も、大分古屋となつて、軒には枯れ葉がつもり、土台には苔が生えている。偶然、都の話しを聞くことがあるが、山にこもつた後に、亡くなつた有名人も多い。そうで無い人々がどのくらい他界したか、とても分からない。

火災もたびたび、どのくらいの家が燃えてしまったのか。この仮の庵はのんきでその心配もないが。本当に狭いところだが、夜の寝床、昼の座る場所はある。一人で生きて行くには、全く問題ない。ヤドカリは小さい貝に棲みつくが、これは自分を良く知っているから、みさがが荒磯に居るのは人を怖がるから。私も似たようなものである。

自分を知り、世の中を知り、期待もせねば交際もせず静かに暮らし、心配事が無いのが気楽である。世の中の人すべて、住家を持つことになっているが、これは必ずしも自分のためではない。妻子や家族のため、あるいは親しい友人たちを思つてなのである。さもないければ、主人や先生のため、中には財産や牛馬

を守るためにづくりもする。私は、人のためでは無く自分が住むために作ったが。今の時代、自分の様子を見れば、訪ねてくる人も無ければ、使用人を雇うことなどありえない。もし広い家を作ったとしても、誰を住まわせ、誰と所帯を持つと言うのか。

友人にするなら、裕福で親切な人がよく、情け深くて正直ならばいいという訳ではない。しかし、そんな都合のいい事がある筈もなく、結局、琵琶、琴や笛そして自然を友人とするのに越したことはない。使用人というのは給料の多寡、色々と有利に取り計らってくれる人を好む。そして、鹹にならぬ程度にしか働かないものだ。自分で使用人になればいい。仕事があれば、それは自分でやればいいだけのこと。疲れると言ったって、人に言いつけ、こまごまと指図するよりは楽である。

歩く必要がある時は、馬に乗ったり、車をつかわず自分の足を使う。多少疲れるかも知れんが馬や車は手のかかる物なのだ。私など、一人で二人分の仕事をしている。手は使用人の役目、足は車の代わりで、私の思い通りに働いてくれる。心身に気を付け、苦しいと思ったら休み、調子のいい時は動く。動くと言っても動きすぎたりはせず、気分が乗らないといっても心配し過ぎないことだ。日ごろから働き、考えつづけるというのが、健康法なのだ。ただ休んでいればいいと言うものではない。人に迷惑をかけ、悩ませたりせず、自分のことは自分で面倒



を見る。

着物の類たぐいも同じ考えでいいのだ。藤ふじのころも、麻あさの着物、手に入ったものを着て肌にまえば十分。野原でつんだヨメナや木の実を食べ、何とか生きて行く。ひとに会う訳でもないのだからかまわぬ。食べ物が少ないので贅沢ぜいたくはできないが、だからこそ旨うまいと感ずるのである。この様なことすべて、別に裕福な人に言っているのではなく、自分の昔と今を比べているだけなのだ。

世の中から逃れ、隠遁いんとんしてしまったので、人を恨うらんだりすることも無ければ、恐れる必要もない。いつまで生きていけるかは天命次第てんめいしだい、浮雲みたいなもので、惜しいとも嫌いやだとも思わず、早く死にたいとも、無理やり長生きしたいとも思わない。うたた寝する時の気持ちよさ、時々見る素晴らしい景色しょうがいが生涯しょうがいの思い出になる訳さ。

この世界というのは心の持ちよう次第だ。心が平静でなければ、牛や馬、珍しい品物も意味がなく、宮殿や豪邸ごうていに住んでも仕方がない。私は今住んでいる、寂しい一間ひとまの庵が非常に気に入っている。もし都に出たら乞食をせねばならず、それを恥じるが、ここに居れば、他人に頼らねばならない方が情けなさないと思うのだ。私のいう事が信じられんと思うなら、魚や鳥を見るがいい。魚は水中に住むのをやめる事はしないが、どうしてか、貴方は知る事ができないだろう。鳥は

林の中に住み続けるが、これも理由を知る訳にはいかない。住んだことのない人には到底分らないだろうな。

そろそろ私の寿命も、月が山の峰に近づいているようなものだろう。三途の川も近くになったというのに、何の文句があろうか。仏の教えでは、何事にも執着するなと言う。今、この庵が気に入っていると、寂しいとか言うことすら執着心の現れ、どうでもいい楽しみを書いてきて、無駄な時間をすごしてしまった。

静かな朝に出した、自らの存在理由を考え続けた答えはこうである――世の中から離れて山に住んできたのは、こころの修行と人間の生き方を考えるため。

それなのに、姿は聖人に似ていても、こころは濁ったまま。住家は浄名居士のようにしても、こころは周梨槃特にすら及ばない。貧しかったためであるのか、迷いが絶ち切れなかったためなのか、私にはわからない。ほんの少し口を動かして、菩薩に念仏を三回ほど唱えるだけである。

建暦二年、三月三十日、桑門蓮胤外山の庵にて。

「月かげは入る山の端もつらかりきたえぬひかりをみるよしもがな」

10 釈迦の在家の弟子。

11 釈迦の弟子。愚人と伝えられる。